

文化を創造する教室を

石窪 満

一 はじめに

今や合同教育研究集会における音楽教育分科会のレポートの少なさは、ここ数年、慢性的になってきている。これは一概に教研集会への消極性とか分科会のあり方、進め方などとどまらず、今の北海道における教育行政のあり方、現場への管理的な締めつけ、音楽を担当する教職員の置かれている状況等々、さまざまな要因が絡んでいることと思われる。その解明は別の機会に譲るとして、今はとにかく今まで培われてきた分科会の成果に学びながら、途切れることなく展望を持ち続けることがなによりの闘いではなかるうか。

今年の分科会は参加者名やレポーターも事前の報告がされ

ないまま迎えることになった。結局、共同研究者と司会者が用意した二本のレポートを中心に話し合いがすすめられた。

また、昨年と同じように大学生の参加が数多くあり、質問や感想としての発言が活発に出された。

分科会の運営として、今年から渡辺健先生が共同研究者陣の中に入って頂いた。そして長いことこの分科会を支えて頂いた佐藤重夫先生及び野村公先生が今年をもって退任されることになりました。この場をお借りして感謝申し上げます。

一一 基調提案にかえて

音楽は、人が豊かに生きていくために欠かすことのできない文化。現在、小学校から高校までの学校教育において、音楽の授業時間が減らされて久しいが、芸術教科と文化の軽視がますます進行している。また例えば、大学入試制度の見直しとして、高校一年生の段階から点数で輪切りし、差別化・分別化される現実が押し寄せてきているが、音楽教育はそれに対峙するものであり、豊かな内面を成長させることが求

められ、一人ひとりが充実し楽しむ音楽の授業を創ることが求められている。音楽を通じて子どもの生き生きとした姿をさまざまな実践交流の中で明らかにすることによって、音楽教育の重要性をアピールしていくことが大切ではないだろうか。

三 実践報告くレポート発表

今回は、小学校の実践と中学校の実践からそれぞれ一本ずつのレポート提案があった。

レポート1 新しい学校で、できること

猶原 あけみ（津別町立津別小学校）

レポート2 いつも新鮮で喜びと文化にあふれる授業を

石窪 満（標茶町中学校時間講師）

先にも書いたとおり、司会者と共同研究者からのレポートだが、（今は運営側からも積極的にレポートを持ってこようという取りくみが提起されている。）提案された順にその内容を若干省略しながら原文を尊重して引用する形で紹介する。

レポート1は、全校朝会での歌の取りくみと特別支援学級の歌とリズム表現の実践についての報告だが、ここでは特別支援学級の実践を紹介する。

1 新しい学校で、できること

猶原 あけみ（津別町立津別小学校）

♪7年ぶりの転勤

担任するのは、特別支援の4年生、たんぼ学級。知的と言語学級在籍の二人との男の子AさんとRくんです。二人とも、とても元気で競い合ったり、協力し合ったり、時にはけんかもし、仲直りしてはまた・・・と、にぎやかな毎日です。

交流先の四年生もとても元気な子どもたちが多く、にぎやか。

♪音楽のスタート

音楽の授業は交流学級に参加していたということ、今年もそうすることにしました。音楽は二人の先生が専科を担当しており、三年生以上が専科の音楽です。

ところが、二人はどうも音楽の授業がきらいらしく、音楽の時間になっても腰が重いです。たしかに教科書の歌の歌詞は読めない漢字がいっぱい使っているし、リコーダーも二人に

とつては指使いが難しすぎるようです。リコーダーも袋から出そうとせず、歌も歌っているようすがみえません。

これはもう「音が苦」になってしまっているな、どうにかしなくちやと思ひながら、四月が過ぎていきました。

♪特別支援の音楽

それと、並行して、特別支援学級に在籍している子どもたちで行っている自立活動の時間に音楽とリズムをやってみては、という案が浮上しました。それぞれ交流の時間もあるため、月に一度できるかできないかの少ない時間ですが、時間割を突き合わせながら、二年生の二人といっしょに四人の子どもたちで音楽を楽しむ時間を設けることができました。

はじめにわたした曲は、「たんぼぼ ひらいた」です。

♪たんぼぼ ひらいた まっきいろに ひらいた

はなびらと はなびらと につこりしながら ひらいた♪
短い曲の中に ことばの楽しさがたくさんあって、子どもたちもすぐ覚えてくれました。驚いたことに、交流学級の中では歌っていないかったAくんもRくんも声を出して歌っていました。

やはり、安心できる集団の中で、心が解放されていることと、音楽のもつ力に後押しされているのかなあと思いました。

この曲にはじまり、つづけて「はずむよ はずむよ」「ホップ

ステップジャンプくん」「森のかじや」「つくしがたよ」を渡しました。たった数回やっただけなのに、1人で歌うこともできるようになってきたのです。

リズム表現も、2人だけより4人の方がずっと楽しくできません。私がピアノを弾き、もう一人の先生がリズムのリーダーをやってくれるので、つつい調子に乗りすぎる4年生の2人を程よく調整してくれます。「とんぼ」では最後の方に止まって足をピッと上げるのですが、いつもスピードを出しすぎてうまく止まれません。暴走族の二人ですが、表情はいきいきしています。

♪学芸会

来週十一月十日には、学芸会があります。練習たけなわの時期・なので、プログラムを見てハツとしたことが。なんと演目が劇と器楽だけなのです。全校的に器楽にけっこう力を入れてるのは感じていましたが、歌はかろうじて5年生が1曲歌うのみとのことでした。専科の先生に聞くと、この学校ではずっとそうだとか。歌わないので歌をさしているのか、器楽がさかんだから自然と歌から遠のいていったのか、それはわかりませんが、全校朝会のあの固さの理由が少しわかった気がします。

たんぼぼ学級の二人は、交流学級の中に入って「ヒットメド

レー2012〜2013」という曲で、コンガを担当し、厳しい練習の甲斐あって？大体楽譜通りにリズムを打てるようになりました。楽しくできてきているのかは、ちょっと不明です。やらなくてはならないことと思っているのか、とりあえず行きたがらないようすは今は見えないのですが、学芸会が終わったかどうかなるのでしょうか？

♪おわりに

九月の特別支援合同学習会に釧路の石窪両先生をお迎えして、リズムを子どもたちと楽しみました。六十人くらいの小中学生と先生方四十人弱の総勢百名で、一時間びっしり体を動かして、リズムの楽しさに浸ることができました。参加が難しいだろうと思われる子どもが自発的に動き出し、担当の先生がすぐく驚いた、という話も聞きました。

AくんもRくんも「これ知ってる」とばかりに先頭の方で楽しげに走り回っていました。同じ子どもの変化を目の当たりにして、音楽の深さを改めて感じました。

これからも、子どもの心に響き、身体で感じる音楽を求めて勉強していきたいと思えます。学芸会が終わったら、何の曲をやるのかな？

レポート2は、閉校に追い込まれている小規模併置校の実態や安心して表現できる教室、一人ひとりの表現や思いをくみ取る実践、学校を取り巻く文化の状況と公開授業の授業記録を報告しているが、ここでは子どもを取り巻く文化のことと授業記録を紹介する。

2 いつも新鮮で喜びと文化にあふれる授業を

―小規模中学校での実践を通して―

石 窪 満(標茶町公立中学校時間講師)

(1) 何を伝えたいのかという理念が見えない

〜文化をつなぎ紡ぐということ

十月十一日(金)に全国の教研で知り合った先生方を迎えて公開授業をする機会を得ました。秋の学校祭が終わった次の週でした。ですからその前までは、ちょうど学校祭の取りくみの真っ最中だったので、小規模校の小学校も中学校も子

どもたちは大忙しです。

その学校祭（文化祭）を前にして、その取りくみや「総練習」をみていて、大きな疑問を持ってしまいました。『♪さあ、僕たちのすばらし希望と夢を！』とか、『♪明日を探そう』

この広い世界で」というような合唱曲はまだしも、学校では絶対教えないであろう英語の曲にあわせてのヒップホップダンスや、テレビでもはやされている今流行りの言葉やギャグを満載にした劇などを見ていると、これがこれから創ろうとしている学校の文化なのだろうかと思ってしまうのでした。

今年の全国「教育のつどい」の音楽分科会での基調報告で、共同研究者が引用した新聞記事を思い出します。それは、3月に検定を通った高校音楽教科書を見て、EXILEや木村カエラその時々々の旬のアーティストの楽曲が増えていることに対して、『親しみやすさ』は現代という時代のキーワードなのかもしれない。しかし、何を伝えたいのかという理念も熱量も持たずして、すでに大衆に指示されているものに乗っかるのが果たして教育なのだろうか。（二部抜粋）（朝日新聞・吉田純子記者）という内容のものでした。

それが文科省や教科書ではなく、現場がそういう状況なの

だから深刻です。率直に言ってこれは教師の文化の問題だと思いました。もう一つの学校では、中学生が「木のうた」（木島始詩 工藤吉郎曲）を朗読と歌（独唱と二重唱）でつくった緊張のステージのすぐあとに、親たちが担当するエレキギターやドラムスをバックに若い教師がJポップを歌う・・・という現実があります。

そんな現実を目の当たりにしながらの公開授業でしたので、そんなことを意識して、私が書いた「公開授業をするにあたってのメモ」（授業略案）に音楽の授業で大切にしたいことを次のように書きました。

音楽の本来の表現というのは、誰かから言われて動き出すのではなく、やむをえず歌うのでもなく、自分の内面から吹き出てくる思いによって、成立するものと思えます。この「内発」が心を突き動かし、歌いたい、表現したいというエネルギーになると思います。

今子どもたちを取り巻く文化は多様です。そして、マスメディアやネットなどからいくらでも享受することができます。しかし、だからといって子どもたちの文化は豊かかといえそれは別問題です。今の視聴率万能主義で、面白おかしく受けのいいものだけが生き残り、肥大化する状況の中では、その渦に翻弄され、むしろ自分の「内発」とは無縁のところ

あると思われれます。

授業では、これからの文化を創造するであろう子どもたちに、今まで長い時間をかけ、確かめられてきた文化を伝えるということ真剣に考え、教材を選び、子どもたちとこの渦に翻弄されることなく素材に真向かいたいと思います。

(2) いつも新鮮で喜びと文化にあふれる授業を

その公開授業は、次のような流れになりました。大まかに三つ部分に分けて展開していくことをイメージしました。歌曲(教材)名を挙げてみますと。

- はじまりの歌 「きょうがきた」(谷川俊太郎詩林光曲)
「ます」(シューベルト曲)
- 組曲「プロメテウスの火」(木村次郎詩 丸山亜季曲)
を少し深める

「海よ」～「鳥よとべ」～「プロメテウス」
～「アテネ」～「プロメテウス」～「プロメテウスは空をゆく」～「高くかかげよ」

*朗読を入れながらうたいつなぐ

○シューベルトの歌曲を歌う

「たび」「どこへ?」「ます」

「詩人、ミュージズのお気に入り」

*新しい曲を渡す

「歓喜」(ヘルティール詩 シューベルト曲)

○みんなで音楽を創る体験を～参観者と一緒に!

*伴奏を変わってもらい、みんなであうたい、

音楽を共有する

オペラ「森は生きている」(林光 台本・曲)

「十二月の歌」「真冬の春」～「四月と

むすめ」「森は生きている」

「プロメテウスの火」は学校祭の発表に向けて急いで渡した感が強く、覚えることに集中してしまい、あまり深まっていませんでした。でも曲を覚える前から朗読の部分も並行してみんなで読み合い、イメージしていきました。こういう進み方は初めてでしたが、朗読や物語性をかなり意識した取りくみにつながり、朗読の表現も豊かになっていったと感じました。学校祭のあとやっと「ギリシヤ・ローマ神話」(野上弥生子訳より 岩波少年文庫)のプロメテウスのところを読んで聞いてもらいました。

そしてこの日も、正義感の強いプロメテウスを知ってもら

うためにも「プロメテウスとパンドウラ」の最後の部分を読
み聞かせをしてから歌に入ることになりました。子どもたちの
「お客さんに聴いてもらう」ための緊張感や合唱の低音パー
トの不安な声ともありましたが、5人のそれぞれの表現に
自由さがあつてお互いが励まし合いながら歌っているように
見えました。この授業でまた一歩、プロメテウスの世界に近
づけたかなと思いました。

㊦ 海よ（組曲「プロメテウスの火」の1曲目）

㊧ 高くかかげよ（同 終曲）

実は、組曲として取りくんだのは初めてだったので、じつ
くり楽譜を眺めて、5人で歌うには・・・と思い巡らしながら
二部合唱に書き直したり、テンポを決めたり、今の男の子の
ために「高くかかげよ」のへ長調を2度下げて変ホ長調にし
たり、と全曲手書きにして楽譜を用意しました。こんなふう
に教材を準備していると、今までなんとなく歌っていた教材
にいろいろ新しい発見があつたりして新鮮になり、音楽が
身近になってきました。

また、作品のとらえ方が思い込みとか独りよがりになって
いないかなと不安でしたが、観に来てくれた先生方から、い
ろいろと意見を聞かせてもらったのも大いに参考になりました

た。

学校祭のあとの最初の授業には、シューベルトの「歓喜」
をうたうことに決めていました。明るくまた優しく刻むよう
な三拍子の曲で、また新しい今までのシューベルトにはない
世界を渡そうと思っていたのです。そしてたった一人の女の
子のSさんのために、と。

三番まで通して歌い、聴いてもらいました。集中して聴い
てくれたようですが、果たして反応はどうだったのか。緊張
していたので子どもたちの表情をよく覚えていないというか、
見る余裕がなかったというところです。でもおもしろかった
のは、最後の♪あふるよろこび♪の最高音のソ#をアーとか
ヒーとか言いながら出そうとしている姿は、普段でもあまり
見せないことでしたので、びっくりしてしまいました。きつ
と構えているとそんな表情は見せないだろうから、最初の時
間としては上出来でしょう！次の時間が楽しみになりました。
それにしても、公開授業という日常的でない授業においても、
子どもたちとの新しい出会いがあることが嬉しく、心が動き
ました。（略）

授業というのは、いつも教室が新鮮な空気というか喜びに包まれていなければならないと思っています。そうはいっても難しいのですが、今回は教研で培われたすばらしい実践者たちが見に来てくれるのですから、その音楽的雰囲気や音楽を創るエネルギーを惜しみなくもらうことにしました。私一人では創り出せない文化がそこに生まれたように感じました。この上昇している教室、創造的に動き出している教室をこれからもなんとかつないでいきたいと思えます。こうやって歌う喜びを積み重ねていくことの大切さをまた改めて痛感しました。

公開授業の3時間後の授業でうたった「歓喜」は、少し張りきっています。本当に喜びあふれているように聞こえます。

㊦ 歓喜

三、分科会における話し合いと今後の課題

レポートを中心に日々の実践を話し合い、音楽教育を通して子どもたちの何を育てていくのか、真摯な意見を交換でき

たことは意義あるものだった。また今年も教職を目指す学生9名の参加があり、新鮮味のある感想をそれぞれが述べてくれた。

・いつも「個」に心を注いでいるつもりでも、見つけれないことがいっぱいある。一人ひとりの表現や思いをくみ取る大切さを心に刻んだ。

・音楽本来の表現というのは、誰かから言われて動き出すものでもなく、やむを得ず歌うものでもなく、自分の内面から吹き出してくる思いによって成立するものではないか。

・教室の安心感というものが、気持ちを解放させてくれるのだと思う。

・一人ひとりの表現を大事にし、また一人でも歌える、表現できる場面を工夫することも大切だ。

・交流学級ではまったく声を出さなかったが、「たんぽぽひらいた」で心を開き、一人で歌ったりいきいきとした表情が見られるようになった。教材のもつ力に後押しされ、よい教材の与えることが子どもを引き出すのではないか。

・流行語やギャグを満載にした文化が、すんなりと学校に入り込んでいる現実が怖い。これは教師の文化の質の問題ではないか。

・教科書にも今流行りのJポップなどが教材として載っているが、芸術教育としての音楽を考えると、これらの音楽が歴史に耐えて残っているかどうかで、教材が試されているのではないか。

分科会の話し合いの流れは、子どもたちとどう向き合うか、安心して自分を表現できる教室とは、子どもの少しずつの変化にも気づき、その喜びを共有する教師とは、など本質的なところを押さえながら、教材のもつ力のことや伝え紡いでいく文化の質のことなどが話し合われた。

今後の課題として、やはりレポート提出の確保とより多くの参加を呼びかけることだろう。各地域からのレポート提出を確保するためにも、事前の取り組みをもつと意図的にしなければならいと思われる。各地域の教研活動を活発にするための取りくみも不可欠だ。

レポート発表の中には、文字による発表とあわせて録音した子どもたちの授業の音楽を聴いてもらう提案もあるが、具体的なイメージをつかむためにもこれからもこのような提案が期待される。また再生機材を常設しておくことが望まれる。

(標茶町中学校時間講師)